旧岩崎邸庭園（1900 年頃～1945 年）の構成と意匠

On the Composition of *Kyu-Iwasaki-tei Garden* (around 1900-1945)

栗野 隆* 服部 勉** 進士五十八**
Takashi AWANO Tsutomu HATTORI Isoya SHINJI

Abstract : Tokyo Metropolitan garden of *Kyu-Iwasaki-tei garden* (former Iwasaki's residence in Taito Ward, Tokyo), constructed by Hisaya Iwasaki the third president of Mitsubishi Group, is today known as one of finest examples of gardens of Meiji period. This paper examines the initial spatial composition of the garden during Hisaya's ownership (1885-1945) and the original design of Shiba-niwa (lawn garden), which has been a decisive characteristic of the garden, under a restorative approach based on interview to Hisaya's bereaved family, examination of existing drawings and old photographs, and comparative study with the other Meiji gardens.

The examination clarifies that the garden was chiefly comprised of four areas; the lawn garden, the Shoin (Japanese style house) garden, the approach and rotary, and the flower garden. Particularly, this study notices significant characteristics of the lawn garden that deserve to title this garden a standard model of Meiji gardens in Tokyo. The result also indicates that the site itself formerly formed Japanese and Western landscape axes, corresponding to the coupling of Japanese and European style houses.

Keywords: *Kyu-Iwasaki-tei garden, lawn garden, Meiji Era Gardens*

キーワード：旧岩崎邸庭園，芝庭，明治期庭園

1. はじめに

都立旧岩崎邸庭園（東京都台東区）は明治期に三菱財閥 3 代目社長・岩崎久彌（1865－1955）によって造営された庭園である。

筆者らはこれまでに本庭園の成立から現在に至るまでの変遷を概観し、本邸宅の和洋両館が竣工したと考えられる明治 29 年頃から国有財産となる昭和 28 年以前の約 50 年間（1900 頃－1952）は明治期庭園の特徴である芝庭が本庭園の中心的構成であったことを明らかにした¹⁾。

しかし、本庭園の敷地内に最高裁判所司法研修所が新設されるために、和館が大広間を除いて取り壊された昭和 44 年（1969）頃から、敷地の東南部分の売却などによって、往時の庭園は相当部分が破壊された。

現在、和館大広間に付設する書院庭の一部に往時の旧状がとどめられているが、かつての芝生園地は園路が失われて草地になっている他、園内に配されていた捨石や和館内に設置されていた灯籠は背後に広がる樹林内に放置され、樹林内には四阿跡の石敷が確認できるにすぎない。

平成 11 年（1999）には、既に国・重要文化財に指定されていた建物と併せて当時の敷地の一部分が「宅地」として国・重要文化財に追加指定され、平成 13 年（2001）に都立庭園として一般公開され現在に至っている。東京都では平成 12 年（2000）に「旧岩崎邸公園検討懇談会」が組織され、公開庭園としての暫定整備の方針や建物の具体的活用方法などが検討されてきた²⁾。ただし、既に和館大広間と洋館の修復工事が実施されてきたにも拘わらず、庭園部分は構成・意匠について不明瞭な箇所が多いため、修復・復原の具体的方針が定まっていないのが現状である。

そこで本研究では、岩崎久彌の孫にあたり、岩崎家の現当主である岩崎寛彌氏並びに岩崎久彌三女の福沢綾子氏への聞き取り調査³⁾⁴⁾、残存図面⁵⁾や古写真⁶⁾の分析、文献調査による他の明治期庭園の検証から、岩崎久彌が和洋両館を新築して庭園を芝庭へ改造し、米国のキャノン機関に本邸宅が接収されるまでの期間（1900 年頃－1945 年）における庭園の構成・意匠を明らかにし、今後の復原への基礎資料を提示することを目的とした。

2. 庭園の構成

(1) 庭園の概況

本庭園は本郷台地の東端部に立地し、邸宅の主要建物は敷地の北側に併置された 2 階建の洋館と平屋の和館であった。また、洋館の北東脇には撞球場（ビリヤード場）が設けられた。

庭園は構成の違いから以下の 4 ゾーンに区分できる（図－1）。A ゾーン：洋館の前面に配された広がり感のある芝生を中心とした主庭

B ゾーン：和館前に設けられた書院庭、和館内の坪庭、和館に付設された内庭

C ゾーン：邸宅の表門から馬車道を経て馬車回しに至る前庭

D ゾーン：敷地の南端部に設けられた花壇園地

B～D ゾーンについては次項から考察することとし、A ゾーンについては本庭園の中心的構成をなしていた箇所であるため、次章で詳述することとした。

図－1 旧岩崎邸庭園（1900 年頃－1945 年）の全体構成

*東京農業大学大学院農学研究科農学専攻 **東京農業大学地域環境科学部造園科学科

(2) Bゾーン：和館の書院庭、坪庭、内庭

書院庭には巨大な縁先手水鉢が設置され、植栽は高木ではマツやモミジ、地被植物ではクマザサが古写真から確認できる。

内庭は網代垣で画されており、マツが植栽され地被にはシバが使用されていた。内庭の西隅部には約 20㎡のひょうたん型の池もあった。和館内の坪庭には、主にモッコクが植栽されていた。

(3) Cゾーン：表門から馬車道を経て馬車回しに至る前庭

邸宅の表門の奥には、木造で和風のしつらえの内門が設けられていた。馬車道は既存の傾斜地を切り通して整備されたものであり、ガス灯も設置されていた。道は粒砂利敷であった。法面の擁壁は玉石積であり、玉石積の上の法面はシイ、ケヤキを中心とした樹林であった。

馬車道を登り切った所にはジョサイア・コンドルの設計による石造の袖塀が設けられており、岩崎家の家紋・三階菱が彫刻されている。馬車回しの中央園地は現在と同様にトウジユロが植栽され、地被はシバであった。

袖塀手前の植込にはモッコクとツツジが植栽されており、手入れによって小さくまとめられていた。玄関脇の植込にもモッコクが植栽されていた。なお馬車回しは砂利敷であった。

(4) Dゾーン：敷地南端部に設けられた花壇園地

花壇園地には温室と盆栽小屋も設けられており、ここで育てられた花や盆栽は和館や洋館に飾られることもあった。花壇にはヒヤシンスやチューリップが育てられ、一部は畑となっていた。

3. 芝庭の構成要素と意匠

(1) 明治期庭園の様式的特徴としての芝庭

旧岩崎邸庭園の主庭部分には、広がり感のある芝生と緩やかにカーブする園路で構成された芝庭が 1900 年頃から存在していた。

明治 43 年 (1910) 出版の『名園五十種』⁷⁾には、旧岩崎邸庭園のような芝生を主体とした庭園が数多く解説されている。その内容は庭園の所有者、所在地をはじめ庭園の全体構成から植栽など各部構成に至るまで具体的に記述され、写真も掲載されている点に特徴がある。

本文献には、東京に所在し、広がり感のある芝庭が特徴となっていたものは 29 庭園が確認できた (表-1)。29 庭園の記述内容の分析から、芝庭の構成要素は大きく①芝生、②園路、③背景植栽、④前景植栽、⑤捨石、の 5 点にあることが分かった (表-2)。

以下、旧岩崎邸庭園に存在していた芝庭の意匠について、上記文献に解説された芝庭を有する庭園の意匠も参照しながら、各構成要素別に再現的に考察した。

(2) 芝生

上記の 29 庭園の記述内容から、広い芝生が建物の前面に配されている点が大きな特徴であり、旧岩崎邸庭園についても同様の構成となっていた。

『名園五十種』には、「和風の座敷にも悪くはないが洋館には一層その調和が可いやうに思ふ」と細川護成邸庭園の記述にあるように、広がり感のある芝生は、旧岩崎邸庭園のような和洋併置式邸宅の特徴的な庭園構成要素であったことが分かった。

(3) 園路

分析した 29 庭園の園路は園内を縦横に交差しており、特に園路形態は緩曲線が重視されていた点に特徴があった。

また、舗装材料は白砂が多用されていた。旧岩崎邸庭園も園路が緩やかなカーブを描いており、聞き取り調査や古写真からも淡白色系の小砂利舗装であったことが分かった。

(4) 背景植栽

背景植栽とは、芝生景の見限り植栽である。分析した 29 庭園では、マツ、ヒノキ、スギなど常緑針葉樹が多用されていたが、

表-1 『名園五十種』に見る芝庭を有する庭園

名 称	所在地	芝生	園路	背景	前景	捨石	その他
松平邸庭園	四谷区鮫ヶ橋	●	●	●	●	●	灯籠
原邸庭園	芝区高輪	●	●	●	●	●	温室 銅像 石仏
大隈邸庭園	牛込区早稲田	●	●	●	●	●	石像 四阿 銅像
山縣邸庭園	牛込区白目	●	●	●	●	●	木櫓 茶寮 鐘露
石黒邸庭園	牛込区早稲田	●	●	●	●	●	流れ 四阿 ベンチ
村上邸庭園	小石川区音羽	●	●	●	●	●	灯籠 四阿 井戸 流れ 像
一條邸庭園	赤坂区福吉町	●	●	●	●	●	四阿 高塔
浅澤邸庭園	王子西ヶ原	●	●	●	●	●	四阿 塔
浅澤別邸庭園	王子西ヶ原	●	●	●	●	●	灯籠
細川護成邸庭園	小石川区豊川町	●	●	●	●	●	●
酒井邸庭園	牛込区矢来町	●	●	●	●	●	流れ
阿部邸庭園	本郷区西片町	●	●	●	●	●	木櫓 流れ 土塀 滝 藤棚
細川清次郎邸庭園	小石川区林町	●	●	●	●	●	池
亀井邸庭園	本所区向島	●	●	●	●	●	藤棚 灯籠 像 温室 噴水
三井三郎助邸庭園	小石川区安藤坂	●	●	●	●	●	四阿 灯籠 石仏
大貫邸庭園	牛込区早稲田	●	●	●	●	●	●
土方邸庭園	小石川区林町	●	●	●	●	●	●
黒田邸庭園	赤坂区福吉町	●	●	●	●	●	灯籠 池
鍋島邸庭園	麹町区永田町	●	●	●	●	●	●
萬福邸庭園	麹町区一番町	●	●	●	●	●	●
高橋邸庭園	麹町区一番町	●	●	●	●	●	流れ 橋
清水邸庭園	大井村	●	●	●	●	●	塔 灯籠
益田邸庭園	芝区高輪	●	●	●	●	●	●
松本邸庭園	大井村	●	●	●	●	●	●
加納邸庭園	大森	●	●	●	●	●	●
三井高信邸庭園	麹町区上二番町	●	●	●	●	●	藤棚 陶欄 花壇 温室 灯籠 像
日比谷邸庭園	芝区高輪	●	●	●	●	●	●
玉塚邸庭園	大森	●	●	●	●	●	四阿
鈴木邸庭園	大森	●	●	●	●	●	●

註：庭園の名称は一般表記に改めた (例えば、松平邸庭園は『名園五十種』では「松平伯爵邸の庭」と記されている)。所在地等は『名園五十種』の原文のままとした

表-2 芝庭の構成要素と特徴

芝 生	広がり感を持ち、大くは平坦な地形を呈する。芝草については、コウライシバが多用されている。
園 路	園内を「縦横」に交差し、緩やかな曲線を描く。舗装材料としては「白砂」や「小砂利」が用いられる。
背景植栽	芝生景の見限りとして植栽される。芝生との対比を際立たせるため、濃い緑のマツ、ヒノキ、スギ、カシなど、常緑樹が多用される。なお、サクラ、モミジが図的に使用されることもある。
前景植栽	園路と接する芝生のへりに点的に植栽される。樹種はツツジやマツが多用され、丸型に仕立てられる。
捨 石	芝生に植栽された樹木のきわに、天端が一坪以上もある大振りの石が伏せて配されることが多い。地際にはクマザサが植栽されることもある。

註：明治期庭園を詳述した『名園五十種』に掲載された庭園のうち、東京に該当された 29 の芝庭の記述内容から作成

表-3 芝庭の植栽

種別	植物名	植栽形態		合計	種別	植物名	植栽形態		合計
		背 景	前 景				背 景	前 景	
高木	マツ	11	38	49	低木	ツツジ	—	11	11
	モミジ	6	12	17		ニシキギ	1	1	2
	サクラ	6	10	16		アジサイ	—	1	1
	ヒノキ	11	4	15		クチナシ	—	1	1
	スギ	9	2	11		ジンチョウゲ	—	1	1
	ウメ	1	6	7		木	—	1	1
	カシ	4	2	6		ツゲ	1	—	1
	コノテガシワ	—	2	2		バラ	—	1	1
	マキ	2	—	2		ボタン	—	1	1
	モミ	2	—	2	草花	クマザサ	2	8	10
	イチョウ	1	—	1		ススキ (カヤ)	—	2 (1)	2 (1)
	ウヤク	1	—	1					
	エノキ	—	1	1					
木	カヤ	—	1	1					
	クスノキ	1	—	1					
	モモ	1	—	1					
	常盤木	6	2	8					
	雑木	—	2	2					
	記載無し	7	1	8					

註：数字は『名園五十種』に記述された植物の出現回数を示す

図-2 旧岩崎邸庭園の芝庭と洋館 (撮影時期は明治 44 年以前)

図-3 旧岩崎邸庭園の推定復原図